

- | |
|---|
| 2. 取組を進めるに当たり困難であった事例
A. コースワークの充実・強化
②分野横断的な科目群、副専攻科目群等の充実 |
|---|

取組を進めるに当たり困難であった事例について

A. コースワークの充実・強化

②分野横断的な科目群、副専攻科目群等の充実

《人社系》

●東北大学教育学研究科総合教育科学専攻

「実践指向型教育専門職の養成プログラム」の事例

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

今回のプログラムは大学院教育の改革であった。本研究科は研究者及び高度職業専門人の養成を目的としているものの、研究者養成に重点が置かれてきた。研究者養成を行うためには、既存の専門学会において研究業績を積み上げることが不可欠であり、そのためにはコースワークも学会志向とならざるを得ず、理論と実践とを結びつける高度職業専門人の養成は容易ではない。研究科全体として分野横断的な科目群、副専攻科目群等の充実はきわめて困難である。

(苦労したこと、困難であったこと、具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

分野融合的な科目群、副専攻科目群等の設定はできなかった原因は、研究を志向する大学院教育の学問的風土である。この学問的風土は、日本の高等教育の文化でもあり、変容させるのは容易ではない。また、近年、円滑な学位授与が求められており、そのためには大学院の初年時から研究テーマを絞り込む必要がある。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

大学院生の視野が狭窄になることを回避するため、大学院生主体のプロジェクト型共同研究を研究科内で公募した。応募条件として、①現代的な課題に取り組むこと、②課題解決型の提案を行うこと、そして③研究チームが複数の専攻から構成されることを求めた。これによって、研究室の壁、研究方法の壁を越えて、共通の課題を追求するチームが編成された。大学院生の評判も高かったため、支援終了後は研究科長裁量経費を用いて継続している。

●東京外国語大学総合国際学研究科言語応用専攻

「即戦力通訳者養成のための高度化プログラム」の事例

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

通訳技能に必要な背景知識を涵養すべく、社会科学諸分野で開講されている科目と連携を図り、通訳実習の機会を提供してもらうなどの相互交流を図った。しかしながら、

2. 取組を進めるに当たり困難であった事例
A. コースワークの充実・強化
②分野横断的な科目群、副専攻科目群等の充実

高度に専門的な知識が要求される場面で、実習にあたった学生が十分なパフォーマンスを残すことができないことが散見された。

(苦勞したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

最も考えられる要因としては、通訳を専攻する学生を対象とした社会科学系科目が存在しなかったこと、加えて科目実現に求められる人材の確保が困難であったことの2点が指摘される。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

こうした問題の解消のため、本プロジェクトで特別に社会科学分野で活躍する講師陣をゲストスピーカーとして定期的に招いた。また、講演前には必ず通訳を担当する学生とのブリーフィングの時間を設け、専門性に学ぶ時間を確保するよう努めた。

〈理工農系〉

●東京農工大学生物システム応用科学府生物システム応用科学専攻

「ラボ・ボードレス大学院教育の構築と展開」の事例

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

すべての研究室で少人数グループに分かれて最先端研究を体験する「基礎技術演習Ⅱ」で、夏休みに、希望に基づいて、学生の研究室への割り振りの決定を行ったが、実施する10月、11月には就職活動を始める学生が現われ、予定通りの研究室での実施が困難になるケースがあった。また、10月入学者の研究室への割り振りができなかった。

(苦勞したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

それぞれの研究室が受け入れることのできる学生数、日時に研究室の事情によって制限があったため、一度決定した学生数、日時を変更することが困難であった。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

それぞれの実施内容は様々であり、受け入れることのできる学生数、日時に余裕のある研究室に学生の変更、追加をお願いした。その場合には、学生の意向と異なるケースもあった。時期的にはこれ以上の対応は難しく、学生の意向とは異なっても、異分野の最先端研究を経験することは意義のあることと判断している。

2. 取組を進めるに当たり困難であった事例
A. コースワークの充実・強化
②分野横断的な科目群、副専攻科目群等の充実

●神戸女学院大学人間科学研究科人間科学専攻環境科学分野

「環境と健康のために行動する女性科学者養成」の事例

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

「大学院セミナー」の実施にあたり、セミナーの開催日時の調整に苦勞した。

(苦勞したこと、困難であったこと具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

基本的な原因は、「大学院セミナー」がカリキュラムに組み込まれていないため、大学院生にその時間を確保することができていないことによる。そのため、参加できなかった学生も存在した。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

できるだけ多くの大学院生が参加できる日時をコーディネーターが毎回調整することで対応した。あらかじめそのための時間枠を設けておけばよかったのかもしれない。

《医療系》

●大阪大学薬学研究科創成薬学専攻、応用医療薬科学専攻

「創薬推進教育プログラム」の事例

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

創薬とイメージングにかかる講義2科目と実習1科目を新規に開講し、薬学研究科と医学系研究科保健学専攻の大学院生がともに履修できるように規程等を整備した。また、既存の12講義科目を両研究科・専攻の相互履修共通科目として設定した。両研究科・専攻にまたがる講義科目であるため、既存の開講科目との時間割調整が困難であった。

(苦勞したこと、困難であったこと具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

各新規開講科目はそれぞれ複数の教員が担当し、講義担当者は大学院だけでなく学部の講義も行っているため、両研究科・専攻にまたがった大幅な時間割変更ができなかった。そのため、一部の開講科目に受講者の偏りが生じた。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

履修規程を改正し、受講科目を単位化できるようにした。また、開講時期を前期に移動させることにより、一定の効果を挙げる事ができた。